

夢者有夢か

「夢者、努力せよ努力せよ。」
「影目録」第4・九箇の言葉

「エピソード」 伊勢守

◎雄偉な教養人 骨格雄偉

偉で品格があり、教養の高い人だったとされている。連歌が巧みで、連歌の宗匠も上泉に何度も訪れたそうである。文字通り文武両道に優れていたばかりでなく、非常に魅力的な人物像が伝えられている(「桂菅村誌」)。陰流を学んだ愛洲伊香斎からは古い術、医業の処方、傷の応急手当での方法を教わった。



上泉の獅子舞。平安時代の承和年間(834—847年)に始まったとされる。戦乱で諸道具は消失したが、獅子頭や笛などは上泉伊勢守が奉納したものと伝えられている。稽古する前に旧利根川(桃ノ木川)で身を清めたという小字名「精進場」がある

命を大切に考えた伊勢守の一面がここにも思われる。試合に袋竹刀を使うことだけがなかつたため、剣術を志す大勢の人が弟子になつていった。木刀を使う稽古は寸止めで行われたが、袋竹刀ではきちんと打ち込めるため、生きた剣の使い方ができ、剣技の継承に大きな効果をもたらした。

◎将軍上覧試合

天保7(1836)年6月18日、塚原ト伝から印可を受けている兵法の達人、時の将軍足利義輝の前で上覧試合を行った。伊勢守の相手を務めたのは弟子の丸目藏人佐である。新陰流兵法の素晴らしさを目の当たりにして、驚嘆した義輝は伊勢守に対して最大級の賛辞をこめた感状を贈った。「上泉ノ兵法ハ古今ニ比類無ク天下トイフベシ。並ビ丸目ノ打太刀コレモ天下ノ軍室者トスベキ也。」

◎新陰流天覧

元龜元(1570)年6月27日、伊勢守は将軍上覧試合に続き、正親町天皇の御前で新陰流の演武を行った。一介の兵法者が御前で兵法を披露することは画期的なことであった。将軍上覧試合と併せ、伊勢守が創始した新陰流の素晴らしさをうかがわせる出来

事である。伊勢守は間もなく、従五位下から従四位下に昇叙されたが、これもまた前例のないことだろう。征夷大将軍の足利義輝をして織田信長が従四位下だったことを考えれば、いかに伊勢守の剣技と人格高貴な人柄が買われていたかがわかる。

◎伊勢守の巻物

伊勢守は永禄8(1565)年4月、柳生宗厳に印可を与え、翌年5月に「新陰流兵法目録」4巻を授けた。これが「影目録」といわれるもので、映画や小説でさまざまな形で取り上げられてきた。なぜ新陰流兵法目録が影目録と呼ばれるようになったのか。この巻物の表紙の文字「新陰流」の「陰」の一字が「影」に書きなおされ、裁相の絵図が描かれているからだと言われる。

「影目録」4巻とは第1「燕飛」、第2「七太刀」、第3「参学」、第4「九箇」。特に「参学」「九箇」「燕飛」を表太刀と呼ぶ。4巻とも最後に「上州之任上泉伊勢守藤原信綱」の署名がある。

「七太刀」は残念ながら伝承されていない。「参学」は「一刀両段」「斬釘截鉄」「平開半回」「右旋左転」「長短一味」の5本。新陰流の極意はこの5本に内蔵されている。参学は禅の「参禅学道」に通じ、禅に詳しかった伊勢守はこの刀法を学ぶこと、つまり刀法に参すること、剣の道を学ぶと考えていたのではないか。

「九箇」は「必勝」「逆風」「太刀」「和太刀」「挫怪」「大詰」「小詰」「八重垣」「村雲」の9本。伊勢守は4巻の説明の最後を「学ぶ者努力せよ、努力せよ」の言葉で締めくくっている。

◎「鹿嶋神(傳)流」第二世

「鹿嶋神(傳)流」の流祖、松本備前守と同流第二世を継いだ上泉伊勢守は鹿嶋神(傳)流の基本太刀として「法定之形五本」をつくり上げた。この中に剣術の基本である「呼吸」「気合」「手の内」「間合いの計り方」「足さばき」「気の上げ下げの修練法」などが示されている。日本武道の地である鹿嶋には弓術、馬術、槍術、剣術、抜刀術など武芸十八般があった。鹿嶋神(傳)流はもともと古い流派で、派生している流派は約30流派。

◎塚原ト伝が地名に

高崎市箕郷町矢原の諏訪神社は永禄3(1560)年に箕輪城主長野信濃守業政が建立後、台風で荒廃していた社を塚原ト伝が再築した。ト伝は上泉伊勢守の兄弟弟子、剣道修行のため境内の弁財天の池で21日間の水行をして祈願、目的を達成した。小字地名の「下神」はト伝の字をとったものと伝承されている。



高崎市箕郷町矢原の諏訪神社